

イタリア・ルネサンス絵画におけるユダヤ表象 —マントヴァの宮廷画家アンドレア・マンテーニャの絵画を事例研究に—

望 月 由美子

札幌市立大学デザイン学部*

抄録：本研究は15, 16世紀のイタリア・ルネサンス絵画におけるユダヤ表象について分析を行うものである。イタリアの宮廷都市を代表するマントヴァのゴンザーガ家では代々、ユダヤ人の経済・思想文化に対する寛容策がとられており、その政治経済運営の一側面を特徴づけていた。とりわけ、マントヴァ侯爵フランチェスコ二世と夫人イザベッラ・デステの治世下では異教文化に肯定的な精神思潮が開花し、著名な人文主義者ピーコ・デッラ・ミランドラ、エジディオ・ダ・ヴィテルボ、マントヴァ貴族のパリーデ・チェレザーラ等が再評価したユダヤ神秘主義思想(カバラ)もひとつの流行的な関心を集め、さらにヘブライ語もまたラテン語やギリシア語に並ぶ第三の聖なる言語として崇敬された。その文化的潮流のなかで、ゴンザーガ家の宮廷画家アンドレア・マンテーニャはヘブライ語をモチーフとする絵画制作を行っており、本論ではそれが看取できる四作品《エツケ・ホモ》、《シビュラと預言者》、《ミネルヴァ》、《聖家族と洗礼者ヨハネの家族》の図像分析を行う。分析に当たっては、マントヴァで共有されていたユダヤ文化に対する関心と、従来ユダヤ人に対するキリスト教社会の態度、すなわちユダヤ人をキリストの敵とみなす伝統的な差別の文化形式の双方を鑑みつつ行い、マンテーニャの作品に見るこの時代独特のユダヤ宗教思想に対する知的・精神的態度なるものを明らかにする。

キーワード：ゴンザーガ家, ヘブライズム, アンドレア・マンテーニャ, パリーデ・チェレザーラ, イザベッラ・デステ

Essay on the Jewish Representations in the Italian Renaissance Paintings: A Case Study of the Works of the Mantuan Court Painter Andrea Mantegna

Yumiko Mochizuki

School of Design, Sapporo City University

Abstract: This paper aims to examine the representations of Jews in Northern Italy in the fifteenth and sixteenth- centuries, particularly in the dominion of the Gonzaga family, and highlights the significant diffusion of Hebraic themes in the Gonzaga court. In the historical context of the broad movement to reassess Judaism (the mysticism of Kabbala) by prominent humanists of the Quattro and Cinquecento, such as Pico della Mirandola, Egidio da Viterbo and Johann Reuchlin, the humanists of the Gonzaga court, such as the erudite nobleman Paride Ceresara, also affirmed the value of the Hebrew language, not only as the holy tongue but also as the third source of knowledge beside Greek and Latin. In fact the religious tolerance characteristic of the Gonzaga rule, especially during the reign of Francesco Gonzaga II (mar.1484-1519) and Isabella d'Este, permitted many members of the Jewish elite

*非常勤講師

to form connections within the milieu of the court. Following a brief overview of the social-historical-cultural situation confronting Jews in the dominion of the Gonzaga family, an iconographical analysis of *Ecce Homo*, *A Sibyl and a Prophet*, *Pallas Expelling the Vices from the Garden of Virtues* and *The Family of Christ with the Family of St John the Baptist* executed by Andrea Mantegna, the primary architect-painter at the Gonzaga court, reveals that the Judaism representations at the Gonzaga court did not necessarily correspond to the traditional image of the Jew as the heretic (the enemy of Christianity). Rather, they were viewed as possessing sublime wisdom; namely, the secret of the God's verbs.

Keywords: Gonzaga family, Judaism, Andrea Mantegna, Paride Ceresara, Isabella d'Este

1. はじめに

北イタリアのロンバルディア平原を流れるポー河の支流、ミンチョ河の北 16 km のところに人口 48,747 人(2015 年 1 月 1 日現在)のマントヴァという小都市がある。そこは、中世以来ミラノやヴェネツィア、ジェノヴァなどの強大な都市国家に挟まれた中継都市として栄え、ドイツやフランスがイタリアへ南下する際の陸の要所とされてきた(図 1)。



図 1 《マントヴァ、都市および周辺》、ゲオルグ・ブラウン(編)、フランツ・ホーゲンベルク(銅版画)、1575 年、マントヴァ市立図書館。

1328 年から 1708 年にかけて、マントヴァはゴンザーガ家(i Gonzaga)の支配のもと、君主制国家として繁栄し、ルネサンス宮廷都市としても名声を誇った。ゴンザーガ家は、マントヴァ県南部のゴンザーガ地方とレッジョ・エミーリア地方で勢力を伸張させたコッラーディ家を祖先にもち、フェラーラのエステ家、ミラノのヴィスコンティ家、ウルビーノのモンテフェルトロ家、リミニのマラテスト家などの名家との結婚政策を通じて権力を増強した。また、皇帝家との姻戚関係を通じて、1433 年には侯爵位、1530 年には公爵位を授爵し、1622 年にはゴンザーガ家初の皇后となるエレオノーラ・ゴンザーガがハプスブルク家出身の皇帝フェルディナンド二世と成婚し、名実ともヨー

ロッパ随一の名門貴族へと成長した家系である。

15 世紀頃より、ゴンザーガ家ではこの政治権力伸張とともに、支配の正統性をイタリア内外に喧伝するため、文学や音楽、絵画や彫刻、宮殿、教会、庭園の造営、演劇オペラ、祝祭などの様々な芸術分野、占星術や錬金術などオカルト教諸学への庇護活動も推進し、エステ家やモンテフェルトロ家のような旧家に比肩する文化力を知らしめた。第四代侯爵フランチェスコ・ゴンザーガ二世(Francesco Gonzaga II, 1466-1519, mar. 1484-1519)と侯爵夫人イザベッラ・デステ(Isabella d' Este, 1474-1519)の治世は、ルネサンス文化の黄金時代を迎え、巨匠アンドレア・マンテーニャ(Andrea Mantegna, 1430/31-1506)が活躍するほか、イタリア各地の文人、芸術家、人文主義者が出入りする洗練された文化サークルを形成し、同時代の文化的リーダーとして矚目を集めるほどになる。

14 世紀から 17 世紀にかけてのゴンザーガ家支配の特徴として、ユダヤ人に対する寛容策がほぼ一貫して採られていたことがあげられる。領内通行許可権のほか、1389 年には銀行営業権、1474 年にはユダヤ教に関するヘブライ語文献の印刷出版が認められ、1511 年にはユダヤ文化を学ぶ大学機能を備えたコムニタ・エブライカ(comunità ebraica, ユダヤ人共同体)も創設され、社会的・経済的⁽¹⁾・宗教的な寛容策がとられていた。

とりわけ 15、16 世紀のゴンザーガ家宮廷では多くのユダヤ人が出入りし、著名なラビのヨーゼフ・コロン(Yosef Colon)、ユダヤ伝統思想研究の分野で重要な役割を果たした医師・哲学者・ラビのヤフダ(Yehudà ben Yechi' èl da Napoli)、医師のポルタレオーネ家(i Portaleone)、ベンジャミン家(i Benjamin)、銀行家ノルサ家(i Norsa)、舞台芸術の演出家・脚本家レオーネ・デ・ソンミ(Leone de' Sommi da Portatone, 1525/27 頃-1590 頃)、舞

踏家イザッキノ・マッサラーノ (Isacchino Massarano), ユダヤ教の宗教音楽家サルモーネ・ロッシ (Salomone Rossi, 1570-1630ca.), 軍事工學に秀でたアブラモ・コロルニ (Abramo Colorni, 1544-1599), さらに薬剤師, 錬金術師, 道化役者, 画家等も活躍した⁷⁾¹⁴⁾.

本稿は, イタリアの宮廷都市を代表するマントヴァのゴンザーガ家において, ルネサンス文化の栄えた15世紀末から16世紀にかけて, ユダヤ人の思想文化・経済活動が寛容的態度で受容され, 宮廷文化の一部を特徴づけていた点に着目し, 当時, 宮廷画家・建築家であったアンドレア・マンテーニャの絵画作品からユダヤに関わるものをケーススタディに取り上げ, 西欧中世すでにステレオタイプ化されたユダヤ人に対するイメージ, ならびに16世紀前後のマントヴァ社会におけるキリスト教市民とユダヤ人共同体との関係から図像分析を行うものである。最終的に, 宮廷の知識エリート層が抱いたカバラへの文化的崇敬の態度と, 排斥すべきキリスト教徒の敵と認識するマントヴァ市民のユダヤ観との二重的な態度が表象されていたことを示唆しようとするものである。

2. 歴史的・文化的背景

1) マントヴァのコムニタ・エブライカの誕生

マントヴァにおけるユダヤ人の最初の定住記録は1145年である。十字軍遠征期を契機に, キリスト教徒の迫害を逃れてきたフランスのプロヴァンス地方, ドイツ系のユダヤ人, さらに外国王朝支配で宗教施策の不安定であったナポリ・シチリア王国, 教皇領ローマからのユダヤ人が北イタリアに中心を占めていた。イベリア半島でのレコンキスタ完了後, すなわち1492年から16世紀にかけては, スペイン, ポルトガル, ナヴァール王国から国外追放となったユダヤ人もイタリア半島に移住するようになる。このとき, マントヴァのコムニタ・エブライカを頼る移住者も増加し, その結果, 15世紀末には人口数およそ3千人と, 領内総人口の約7パーセントを占めるほどになった²⁾。

2) イタリア・ルネサンス期におけるユダヤ神秘主義(カバラ)の再評価

西欧でユダヤ人追放の動きが強まったこの時

期, イタリア半島ではかつてないほど, ユダヤ教を含む異教文化に寛容であったルネサンスの最盛期を迎えていたことは重要である。プラトン, アリストテレス, キケロやセネカ, プロティノスなどの非キリスト教の文献を, ラテン語やギリシア語の原語・翻訳・註解を通して読み, キリスト教以外の世界観があることを知り, それまで盲目的に信じてきたカトリックの教えや信仰のあり方にとどまらない, 新たな哲学思想の視座からキリスト教神学の真理に近づこうとした時代であった。宗教改革前のこの時代はかつてないほどキリスト教以前の古代の叡智に対する再評価が高まり, 豊饒で多様な異教思想が入り込んでいた。そのなかでも非常に重要な一部分に, ユダヤ神秘主義思想のカバラ (Kabbalah, ヘブライ語 קַבָּלָה, “伝統を受ける”の意味) に対する崇敬が生まれていたのである。

カバラとは, 選ばれた者にのみ伝えられる口伝的教理で, ユダヤ教の伝統に基づいた世界創造論, 宇宙および魂の位階論, メシア論を伴う神秘主義思想である⁴⁾。カバラではとりわけ, 旧約のモーセが神から十戒を授かったときの言葉, モーセが神から律法の奥義を授かったときの言葉であるヘブライ語が神聖視され, ヘブライ語の文字自体に神秘的な力, 神の叡智がすでに含まれていると考えられた。

15世紀に移住してきたスペイン系ユダヤ人のなかには知的エリート層もいた。そのため, これまでイベリア半島内のユダヤ人たちで伝承してきたカバラの奥義がイタリア半島にもたらされることとなった。つまり, レコンキスタは単なる人口移動の問題だけではなく, イタリア半島がかつてないユダヤ思想文化(ヘブライズム)に関する情報発信地になったことも意味した。なかでも重要なスペインのカバリスト(ユダヤ神秘主義者)としてヤコフ・チャヤット (Yaaqov Chayyat) がおり, 彼はマントヴァのラビを頼って移住し, カバラ哲学に関するヘブライ語文献の執筆や出版活動を展開した³⁾。また, フィレンツェの著名な哲学者ピーコ・デッラ・ミランドラ, ローマ教皇庁で活躍した枢機卿エジディオ・ダ・ヴィテルボ, マントヴァの貴族でイザベッラ・デステの文化的助言者として力を揮った人文主義者パリーデ・チェレザラ (Paride Ceresara, 1466-1532) などのイタリア人文主義者たちは, ヘブライ語はプラトンやアリストテレスの文献と同様, そのままキリスト教の教

理(真理)を伝える古代叡智と捉え、この神学のなかにキリスト教教義の真理が隠されているとするキリスト教カバラの思想を発展させた。

3) ゴンザーガ家宮廷におけるユダヤ宗教思想文化(ヘブライズム)への知的関心

ルネサンス文化が最盛期を迎えた16世紀前後、ヘブライズムに強い関心を向けたのがマントヴァ侯爵夫人イザベッラ・デステである。1490年に第四代マントヴァ侯爵フランチェスコ・ゴンザーガ二世と結婚した彼女は、マントヴァ貴族の博学な人文主義者で、占星術やカバラなどのエゾテリズム(秘教)にも造詣の深かったパリーデ・チェレザラ⁹⁾¹⁰⁾²⁶⁾³⁷⁾を文化的助言者にもつことで、ヘブライズムへの関心を深めたと推定される。A. ルツィオとR. レニエールの研究(1899)からも、イザベッラが1490年代にユダヤ宗教思想に関わる、『ヘブライ語詩篇の意義』(Simuse tillim)をユダヤ人から入手しようと熱心に求めていたこと、また亡くなる1539年もユダヤ人ジュゼッペ・ファヴィオの著作『ユダヤ教の美について』(De bello judaico)を入手しようとしていたことが知られている²⁵⁾。

また、マントヴァでは1474年頃よりユダヤ人医師でラビのアブラハム・コナート(Abraham Conath)とその家族が印刷出版業の活動をはじめ、16世紀から1864年までの間、カバラ思想をはじめとするユダヤ教関連のヘブライ語文献出版が盛んであった。15世紀後半には、マントヴァ出身のユダヤ人哲学者で、ピーコ・デッラ・ミランドラのヘブライ語教師であったヨハナン・アレマンノ(Yochanan or Yohanan Alemanno, 1435頃-1504頃)も活躍し、カバラの奥義とキリスト教神学の融合研究に関するヘブライ語文献の執筆活動を行い、先述のパリーデ・チェレザラと直接知己を得た人物であった³⁾。

つまり、16世紀前後のマントヴァ宮廷では、知的エリート層間でユダヤの宗教哲学思想への関心が高まっており、宮廷文化活動の一部として、キリスト教文化を深化させる古代哲学、古代の叡智としてユダヤ神秘主義思想のカバラ、並びに、聖なるヘブライ語を知的・文化的に受容する環境が整っていたといえる。

3. フランチェスコ・ゴンザーガ二世の治世におけるユダヤ人寛容政策とキリスト教市民の反ユダヤ主義運動

マントヴァを含む中部・北部イタリア半島全体でユダヤ人の人口が増加し始めたのは15世紀である。フランチェスコ二世も歴代君主に倣い、ユダヤ人に特権を与え、保護する立場にあったことがシモンソン等の研究から知られている³⁸⁾。

たとえば1484年、反ユダヤ主義の旗手で知られるフランチェスコ会修道士バルナルディーノ・ダ・フェルトレがマントヴァを訪れ、市民に反ユダヤ主義を呼びかける説教を繰り返した。このときフランチェスコは、民衆がユダヤ人暴動へと扇動されないよう、バルナルディーノに都市の中心にあるサン・ピエトロ広場で説教を行うことを禁止した。また、ユダヤ人への迫害暴動が起きた1490年の復活祭のときは、たとえ子どもであっても、ユダヤ人に誹謗中傷、虐めを行ったキリスト教市民は厳罰処分にする命令を公布した。さらに1509年には、中世より強制義務化されていた黄色円環形の“ユダヤ人のバッチ”の着用を免除するなど、視覚的な差別緩和となる社会的措置もとられた。しかしマントヴァのキリスト教市民によるユダヤ人差別、迫害行為が完全に収まることはなく、1513年に再びフランチェスコは「ユダヤ人に対して、その他の人に対しも、傷つけることは一切許さないものとする」との布令を出していた⁸⁾¹⁷⁾³³⁾³⁴⁾³⁸⁾。

つまりキリスト教徒であるマントヴァ市民にとって、異教徒であるユダヤ人に対する敵視・憎悪は恒常的に潜在しており、その社会的不満・恐怖心はしばしばユダヤ人排斥暴動として現れ、市民とコムニタ・エブライカと共存関係はつねに緊張感のある複雑な状況に置かれていたのである。

4. ユダヤ・イメージのステレオタイプ

1) ユダヤ人の図像学

西欧中世社会においてまず最も知られたユダヤ表象は、キリスト教会(エクレシア)に対するシナゴグ(ユダヤ教会)の寓意像である。M. シュラウフの論攷「教会とシナゴグの寓意」(1939)、L. レオーの浩瀚な『キリスト教美術』(1957)によって明らかにされている通り、写本の細密画やパリのノートルダム大聖堂、ストラスブル大聖

堂の柱彫刻に、ベールで目隠しされ、砕かれた槍とユダヤの律法をもつ女性像でシナゴグが登場し、キリスト教会に敗北する無知な異教徒として表象されていたのが初期の作例である³²⁾³⁵⁾。

十字軍遠征の高揚とともにユダヤ人に対する反ユダヤ主義運動が広まるようになると、やがて様々なユダヤ人に対する中傷(言説)や表象が生まれてくるようになる。J.トラッハテンベルク(1943)、E.ザフラン(1973)、P.カプラン(2005)、E. C.ブロック(2006)等の反ユダヤ主義の表象研究から²⁾¹⁶⁾⁴¹⁾⁴⁶⁾、ユダヤ人イメージとして高利貸し、外科医、悪魔の共犯者、キリストの迫害者、聖母の敵など反ユダヤ主義と呼応しつつ徐々に悪魔化したイメージが形成されていたことが知られている。また、身体的な図像学的特徴として、鷲鼻、顎鬚、民族衣装の尖型帽子、ユダヤの黄色のバッジ、眼鏡などアトリビュートが付加され、さらに雌豚(偽改宗者、背徳者)⁴⁾、山羊(異教徒)、蠍(欺瞞、裏切り)、梟(キリスト教[光の中]ではなく、異教[闇の中]に生きる者)など動物にも結び付けられ、版画や細密画、建築装飾などに表され、西欧社会に流布していった。

2) 敵のイメージのステレオタイプ—血の中傷(儀礼殺人、聖体の冒涇者)

ルネサンスの時代における悪魔化したユダヤ人像を示す有名な作品としては、15世紀末から17世紀にかけて多数制作された《福者シモンの殉教》(図2)があげられる¹⁷⁾。1475年3月26日復活祭前夜に北イタリアのトレントで2歳のシモンという皮なめし職人の息子がユダヤ人の儀礼殺人の生贄になったとする事件を描いたものである。儀礼殺人とは、ユダヤ教の儀式のためにユダヤ人がキリスト教徒の幼児を拉致して生き血を吸い取るという言説であり、12世紀以降、広くヨーロッパに浸透したユダヤ人への中傷のひとつであった。

現在、ブレシャ県チェルヴェーノ教区教会堂内には、15世紀末に制作されたシモンの殉教場面のフレスコ画が残されている。



図2 作者不詳《副者トレントのシモンの殉教》、15世紀末、フレスコ画、チェルヴェーノ(ブレシャ県)、サン・マルティノー教区聖堂。

そこには、シモン以外の男性全員が衣服の胸や肩、裾に黄色のバッジを身につけ、誰の目にもユダヤ人と特定できるよう識別化されている。さらに右端の人物はユダヤ人特有の顎鬚に尖型帽子を被り、シモンを縛りつけている右側の男性は鷲鼻が強調されるなど、ユダヤ人の図像学的特徴も示されている。シモンの殉教場面をあらわした絵画や彫刻、版画は、北イタリアばかりでなくドイツやオーストリアでも制作され、ユダヤ人への恐怖、憎悪、差別を増幅する反ユダヤ主義のシンボル・イメージとして流布した。

同時代のイタリア・ルネサンス絵画で、現在ウルビーノの国立マルケ州美術館に所蔵されているパオロ・ウッチェッロの連作画《冒涇された聖体の奇跡》(1467-69頃)(図3)もまた、ユダヤ人中傷のステレオタイプの一型として知られる主題である²¹⁾。1290年のパリでの逸話をもとにしたもので、ユダヤ人商人が、キリストの聖体〔聖別を受けてキリストの肉に聖変したパン、これを刺すと血が滴り出ると信じられていた〕を手に入れ調理しようとしたところ、その聖体から血が流れた奇跡が生じて事態が発覚し、そのユダヤ人の一家全員、身重の妻も幼い子どもまでが火刑に処せられたという話である。



図3 パオロ・ウッチェロ《冒瀆された聖体の奇跡》(場面5), 1467-69 頃, 板, 43×58 cm, ウルビーノ, 国立マルケ州美術館。

これはウルビーノの聖体拝領信徒会の依頼でウッチェロが制作した作品であった。ウッチェロの作品ではユダヤ人の姿に特段、差異化は与えてはいないが、ヴァティカン図書館、ローマの国立アカデミア・デイ・リンチエイ所蔵のインクナブラの木版画《聖体の奇跡》では、ユダヤのバッジをつけた男性たちが聖体を火にかけ、剣で突き刺そうとしている様子として表されており、ユダヤ人差別の主題としては非常にポピュラーなものの一つを成していた。

3) マントヴァのユダヤ人銀行家ダニエレ・ノルサ



図4 作者不詳《聖母子と諸聖人, ノルサ家》, 1499 年頃, マントヴァ, サンタンドレア教会堂。

作者不詳のこの板絵は、1498~99 年頃、アグスティノー修道会の司祭フラ・ジローラモ・レディーニが勝利の聖母教会堂を飾るために依頼したことが知られており、現在はマントヴァのサンタンドレ教会堂聖セバスティアヌス礼拝堂の祭壇画とし

てある¹⁷⁾。

ユダヤ人銀行家として成功したノルサ家のダニエレは、1493 年にマントヴァに移住し、1495 年にはマントヴァ市内に邸宅を購入していた。その際、司教代理人の許可を得た上で、家の壁画にあった聖母像を取り除き、代わりにノルサ家の家紋を裝飾させた。これがマントヴァ市民にユダヤ人の不敬行為と映り、キリストの昇天祭のときの宗教行列がノルサ家の邸宅を襲撃するという事件を引き起こした。このときマントヴァ侯爵であったフランチェスコ二世は事態収拾に当たって、ノルサの邸宅を没収し、そこにサンタ・マリア・デッラ・ヴィットーリア(勝利の聖母)教会堂を建設して市民の気持ちを抑え、さらに主祭壇画の《勝利の聖母》(現在、ルーヴル美術館所蔵)をゴンザーガ家の第一宮廷画家であるマンテーニャに依頼し、その制作代金 110 ドゥカート金をダニエレに支払わせた²²⁾。この教会堂の管理を任されたアグスティノー修道会の司祭ジローラモ・レディーニが、教会内に飾るもう一枚の絵画を依頼した。それがこの《聖母子と諸聖人, ノルサ家》(図4)である。

玉座に座る聖母子、右側に聖エリザベツと洗礼者ヨハネ、左側に聖ヒエロニムスとライオンが描かれており、聖母の下にノルサ家の4名(ダニエレと妻、息子イサクとその妻)描かれている。ここで異教徒であるノルサ家がなぜ聖母子と共に描かれていたのかが問題となる。しかしその答えは、聖母の頭上を飛ぶ天使たちが支え持つラテン語の碑文《Debellata Hebraeorum Temeritate》(無分別なユダヤ人の敗北)に示されている。つまり、聖母像に不敬を働いた無分別なユダヤ人一家をいわば見せしめる目的で一緒に描いたということになる。このとき、ダニエレとイサクの胸には黄色のユダヤのバッジがつけられ(既婚のユダヤ人女性はつけなくても良いとされた)、事件終結後も永遠に“無分別なユダヤ人”として懲罰的なイメージの制裁なるものを受け続けたといえる。

5. マントヴァの第一宮廷画家アンドレア・マンテーニャ

マントヴァの宮廷画家となるアンドレア・マンテーニャ¹⁾は、パドヴァ近郊で生まれ、画家フランチェスコ・スカルチオーネ(1397-1468)の弟子として人文主義的気風にあふれる大学都市、パドヴァの工房で徒弟時代を過ごす。その間、パド

ヴァ大学の教授ウリッセ・デッリ・アレオッティ (Ulisse degli Aleotti, 1412-68), 薬学・医学に通じたジョヴァンニ・マルカーノヴァ (Giovanni Marcanova, d. 1467), 友人の人文主義者フェリッチェ・フェリチアーノ (Felice Feliciano, 1433-1479)等の知識人たちと交流を持ち, 考古学的知識や数学, 人文主義的教養を熱心に学んだことも知られている¹¹⁾¹⁹⁾²²⁾²³⁾²⁹⁾³⁶⁾. 17歳で独立すると, モデナやヴェローナ, クレモナ, フェラーラの宮廷から次々と制作依頼を受け, 結婚相手にはヴェネツィアで最大の工房を抱えたベッリーニ家の娘ニコロジアー・ベッリーニ (Nicolosia Bellini) を妻としてヴェネト地方の美術も貪欲に摂取するなど, 早い時期から才能を見せた. 20代ですでに名声を上げたこのマンテーニャに白羽の矢を立て, マントヴァの都市文化事業の刷新を試みようとしたのが, 第二代侯爵ルドヴィーコ・ゴンザーガ二世である. マントヴァの宮廷芸術家として招聘されたマンテーニャは, その後もフェデリーコ一世, フランチェスコ二世と三代に渡るゴンザーガ家君主に仕え, 宗教画から肖像画, 神話画, 寓意画など多彩のジャンルを手掛け, ルネサンスの巨匠と呼ばれるに相応しい人文主義, 考古学的教養をもって施主のニーズに応じた作品制作を行った.

マンテーニャが活躍した15世紀後半から16世紀初頭のマントヴァ宮廷ではまた, 詩人・神学者・人文主義者のカルメル会修道士パッティスタ・スパニョーリ (1448-1516), 詩人・人文主義者のパッティスタ・フィエラ (1450-1540), 占星術やカバラ等のオカルト諸学にも通暁した碩学パリーデ・チェレザーラ (1466-1532)等が活躍しており³⁾¹²⁾¹⁵⁾, 1490年以降は文学, 美術, 音楽, 舞台, 占星術にも造詣が深いエステ家出身のイザベッラ・デステがマントヴァ侯爵夫人となって, マンテーニャのパトロンとしても力を揮った.

マンテーニャは生涯を通じてその彫刻的な硬い人体把握, 数学的な正確さなど様式的特徴は変わらなかったが, 主題や好んで描くモチーフについては, 施主の嗜好またはゴンザーガ家の文化サークルで共有された哲学思想的影響を受け, とりわけ1490年代以降, エゾテリズム(神秘主義)や学術的な古代異教神話の引用が看取されるようになる. とりわけ, イザベッラ・デステをパトロンにもつようになってからの作品だけに見られるのが, ヘブライ語(もしくはヘブライ語に似せて

書かれた擬ヘブライ語)を使ったモチーフである. この時期, カバラに通暁した文化的助言者パリーデ・チェレザーラが近くにおり, マンテーニャの絵画作品の図像プログラム考案者としても活躍した. マンテーニャがユダヤ思想文化に関心を示したことを明かす文献記録は見つかっていない. しかしながら, 古代研究に熱心でラテン語に通じたマンテーニャがその知的関心の一部に当時隆盛したこの古代神学を置くことは十分に推測でき, 少なくとも作品のモチーフにする際, 図像構成上の意味を考慮する何かしらの知識を得ていたことは間違いないといえる.

6. マンテーニャの絵画作品におけるユダヤ表象

管見の限り, マンテーニャの絵画作品のなかで, ヘブライ語(ヘブライ語に似せて書いた擬ヘブライ語を含む)の表記が見出せるものは4点である. いずれも1490年以降の晩年の作品である. キリストの受難を描いた《エッケ・ホモ》(1500頃)⁵⁾, 旧約の主題である《シビュラと預言者》(1495頃)⁶⁾, イザベッラのストゥディオーロ用に制作された《美德の園から悪徳を追い払うミネルヴァ》(1496-1502頃), マンテーニャが自分の墓碑に飾るために準備した祭壇画《聖家族と洗礼者ヨハネの家族》(1504-06頃)である. これらは美術史ですでに先行研究を数多くもつ作品群であるが, 今回はとくにこれまであまり顧みられなかったユダヤ表象の部分に特化して考察していく.

1) エッケ・ホモ

まず《エッケ・ホモ》(図5)から見ていきたい. この「エッケ・ホモ」(この人を見よ)【ヨハネ19:5】は, キリストが磔刑に処せられるまでの受難の一場面としてルネサンス以降, 数多く描かれた主題のひとつである⁷⁾.

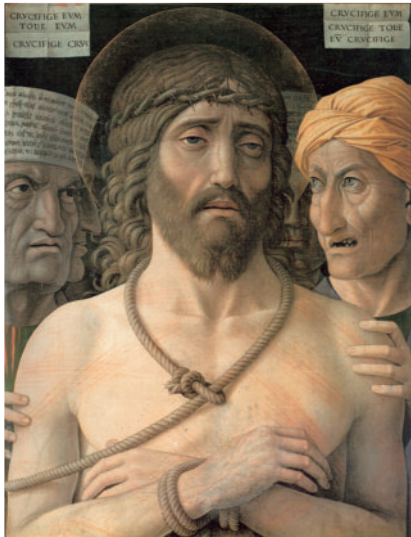


図5 アンドレア・マンテーニャ(工房?)《エツケ・ホモ》, 1500年頃, テンペラ, 糊・金, キャンバス, 54×42 cm, パリ, ジャックマール=アンドレ美術館。

美術作品としては、アントネッロ・ダ・メッシーナやアンドレア・ソラーリオの作品にみられる、茨の冠をかぶり、悲しみと憐みの表情を浮かべるキリスト一人だけを描いた礼拝図的構成のタイプ(図6)と、ヒエロニムス・ボスやクエンティン・マセイス等の作品に見る、ピラトの官邸(もしくは審問所のバルコニー、町の広場)でキリストを嘲笑し、敵意をあらわす多くの人々と合わせて描かれる物語形式のタイプ(図7)とがある。



図6 〈礼拝図形式〉
アントネッロ・ダ・メッシーナ《エツケ・ホモ》, 1473年頃, 油彩, 板, 48.5×38 cm, ピアチェンツァ, コッレージョ・アルベローニ。



図7 〈物語形式〉
ヒエロニムス・ボス《エツケ・ホモ》, 1475年以降, テンペラ, 油彩, 桤材の板, 71×61 cm, フランクフルト, シュテューデル美術館。

マンテーニャ作品は構図としては礼拝図的な前者を採用しているが、キリストを一人だけで描かず、その左右に敵意を露わにするユダヤ人を配置し、一層キリストの憐みの情、深い悲しみを表すよう構成されている。

画面を見ると中央のキリストは捕縛されたことを示す首の縄、鞭打たれた傷の残る上半身と両腕、茨の冠を被せられ、疲れ切った表情を浮かべるキリスト、左右には鷲鼻の線が強調した男女が、キリストの腕を掴み、彼を激しく睨み付ける表情で描かれている。

画面右側の女性を見ると、ユダヤ人を象徴する黄色のターバンを頭に巻き、歯の抜け落ちた口を釣り上げ、今まさにキリストを罵っている様子であることが示されている。一方、画面左端の男性は、額に紙のような帽子を被り、文字がびっしりと書き込まれている(図8)。これは、ヘブライ語の筆記体(図9)に類似しているが、恐らくマンテーニャが真似て記した、いわば擬ヘブライ語である⁽⁸⁾。

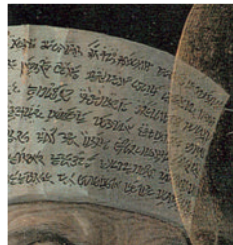


図8 図5の部分。

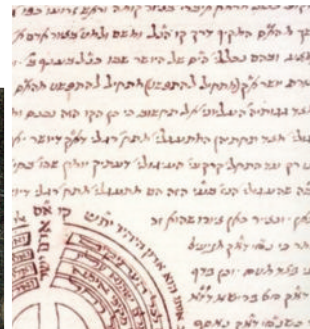


図9 ヘブライ語の筆記体。
ラビ・チャイム・ヴィタル著『アダム・ヤシヤル』, マントヴァ市立図書館。

強い筆致で字体が斜めに傾き、このユダヤ人男性の心理状態、もしくは興奮状態にあったユダヤ群衆の罵倒の声を示しているかのように看取できる。画面上部の左右には、ラテン語で《CRVCIFIGE EVM. TOLLE EVM. CRVCIFIGE CRVC.》(十字架にかけろ、彼[キリスト]を捉えて十字架にかけろ)と書かれた紙片があり、キリストを取り巻く群衆の叫びが明示されている。

先述した通り、15世紀末から16世にかけての Mantova 領内で、キリスト教市民による反ユダヤ暴動がしばしば起きており、反ユダヤ主義の論客であったフランチェスコ会修道士ベルナル

ディーノ・ダ・フェルトレ、ドメニコ・ダ・ボンツォーネが扇動的な説教を行った際も、市民によるユダヤ人排斥の暴動が起きる内政不安が常に存在した⁹⁾。そのため、フランチェスコ二世は領内のユダヤ人が危険から身を守るために、1492年、ユダヤ人にキリスト教徒からの暴力に抗する護身の武器携帯も認可している状況であった。

この《エッケ・ホモ》に見られるユダヤ人像は、明らかにキリスト教徒の敵としての伝統的な図像学(鷲鼻, 黄色のターバン)である。キリスト教徒であるマンツァ市民にとって、マンテーニャにとっても、敵と映るキリストの迫害者のイメージがつくられていたといえる。カリグラフィーに関心の強かったマンテーニャはさらに、ラテン語、擬ヘブライ語でのスクリプトをこの図像に加え、聖書の情景で語られていたであろうローマ兵やユダヤ司祭、民衆の言葉を、古代ラテン語、ヘブライ語での叫びとして周囲の人物像に重ね、一層強く画面に引き込む効果を得たものと思われる¹⁰⁾。さらに礼拝形式を採用した画面構成は、観者(キリスト者)を深い神への信仰へと導き、一方で異教徒への敵意、憎悪を高める礼拝性と物語性の双方を有した作品であったといえる。

2) シビュラと預言者

次に《シビュラと預言者》(図10)の作品を見て



図10 アンドレア・マンテーニャ《シビュラと預言者》, 1495頃, 油彩, 59×51.4 cm, シンシナティ, シンシナティ・アート・ミュージアム。



図11 (図10の部分)

いきたい。右側の老齢の男性と左側の若い女性が巻物の書簡(図11)を手にしながら、議論している場面が描かれている。

この主題特定については、従来大きく三つ出されており、第一は、クリステラーやクナップ等によって出された、エウゼビウス著『教会史』を文学的源泉とするシビュラと予言者を描いたものとする説、第二に、ヴェントゥーリ等が提唱したクマエの巫女がローマ王タルクィニウスに9本の託宣を高値で買い取らせる場面という説、第三に、ユダヤ研究で知られるランズバーガー(1952)が指摘した旧約のエステル記の場面、すなわちユダヤの賢女エステルがその勇気でユダヤ民族を虐殺陰謀から救済した後、安寧を祝うプリム祭の制定のため養父モルデカイと書簡を準備している場面とする説である⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾⁽²²⁾⁽⁴⁰⁾⁽⁴²⁾。エステルはユダヤ人のモルデカイの養女で、その美貌で王宮入りし、クセルクセス王の寵愛を受けて后となった人物である。

画面を見ると、王宮の出入口らしい場所に男女二名が立ち、左側の若くて美しい女性は、頭に大きなアラベスク模様を施した宝石つきの王冠のようなものを被り、目の前の男性がもつ巻子の内容について詳細な指示を出しているように描かれている。一方、右側の老人は深く刻まれた皺、ユダヤ人特有の強い鷲鼻、長い二又に分かれた顎鬚を蓄え、トルコ風のターバン付き尖型帽子を被り、ドレーブをたっぷりとした襪の多いパンツを履き、この女性の指示に対して何か答えているような身振りをとっている。

この作品は長年、クリステラーが提唱した旧約聖書に登場するシビュラと預言者との特定で解釈が進められてきた。旧約の預言者が語っているのは神意であり、預言者がシビュラと議論している

巻物の内容はヘブライ語(に見える擬ヘブライ語)で記載され、古代の叡智がその巻物に記されているとするものである。

ランズバーガーは一方、女性か被る王冠、二人が手にする巻物の書簡、王宮前の扉前に立っている情景、ユダヤ人に特徴的な男性の鷲鼻などの図像学的特徴から、ここに描かれているのはペルシア王の門番を務めたユダヤ人モルデカイと、その養女でペルシア王クセルクセスの愛后となる美女エステルと特定している²⁰⁾。このとき二人が手にしている巻物は、エステル記の最後に記されたプリム祭に関するエステルの言葉をまとめた文書であろうと指摘した。プリム祭は虐殺を逃れたユダヤ人が安寧を祝うユダヤの重要な宗教祝祭であり、エステル記の最後でも、「ユダヤ人モルデカイが王妃エステルと共に(日付を)定め」、「エステルという言葉によってプリムに関する事項は定められ、文書に記録された」【エステル9：31-32】とある。

図像学的にみて、第二を除く第一と第三の説は説得力をもっている。いずれにせよ、旧約聖書の登場人物を描いたものであることと、ヘブライ語で書かれた文書を中心に議論を展開している場面であることは一致している。また、先述の《エツケ・ホモ》で見たような従来のユダヤ人像に特徴的なネガティブな要素、キリスト教徒の敵と認識される場面設定、人物表現はここでは認められない。右側の男性像は鷲鼻にターバンというユダヤの特徴が付与されているが、その一方で老賢者の品格も備えている。これは、D.ハラン(2014)の指摘にもある通り、西欧キリスト教圏ではユダヤ人 Jews とヘブライ人 Hebrews の間の区別が明確になされていたことを示している¹³⁾。モーセやダヴィデ、預言者のイザヤ、エレミヤ等の旧約の時代における古代ユダヤ人(ヘブライ人)は、キリストの祖先、キリスト降誕の預言者、もしくは新約の予型として重要な意味をもっていたのに対し、キリストと同時代に活躍し、新約で「キリスト殺し」の罪を追うことになるユダヤ人は、キリスト者にとって宗教的・社会的・文化的な敵、他者として区分される⁴⁸⁾。

クリステラーの解釈をさらに推し進めたウイントは、アポロンの信託を受けるシビュラが、旧約の預言者に対して聖書釈義している場面としたが⁴⁴⁾、それに従えば、画面上で二人が手にしている文書は、一般の人間には具体的内容が明かされないキリスト教の真理、神意を示し、それを解き

明かす鍵として現れる学問が、古代神学(カバラ)であった。この作品自体がカバラの奥義に直接関わるものではないにせよ、ヘブライ語(実際には擬ヘブライ語)という言葉がもつ神秘的なaura、象徴機能を期待し、描かれていた点で、幾分当時のヘブライズムなるものが意識された作品であったと思われる。

3) 美德の園から悪徳を追い払うミネルヴァ

続いて《美德の園から悪徳を追い払うミネルヴァ》(図12)を見ていきたい。現在ルーヴル美術館所蔵となっているこの作品はもともとイザベッラ・デステのストゥディオオーロ(小書斎)を飾るためにマンテーニャが制作したものであり、図像プログラム考案者はパリーデ・チェレザーラであることが、ウイントやフェルハイエン等の研究から明かにされている⁴³⁾⁴⁵⁾。



図12 アンドレア・マンテーニャ《美德の園から悪徳を追放するミネルヴァ》、1496-1502年頃、テンペラ、油彩、キャンバス、159×192cm、パリ、ルーヴル美術館。

画面前景には、肉欲、欺瞞、怠惰、憎悪、詐欺、悪意、嫉妬、好色、忘恩、吝嗇などの悪徳が様々な異形・怪物の姿で表されている。画面左に、鎧兜を身につけた叡智と戦いの女神ミネルヴァ(ギリシア神話ではパラス)が駆けつけており、これらの悪徳を一掃しようとする様子で表されている。注目されるのは、画面の左端、ミネルヴァの前景左側に立つ月桂樹の全身に巻き付いている白いスクロール(巻物)(図13)である。スクロールには三種類の異なる字体で文字が書かれており、上段からラテン語、ギリシア語(実際にはギリシア語の筆記体風のラテン語)、ヘブライ語(これも

実際にはヘブライ語のブロック体(図14)を真似た文字で碑文が記されている。

この碑文には、美德の母が自分の庭に巢食う悪徳を追い払うよう天上の神々に訴えるメッセージとなっており、上段のラテン語碑文から《AGITE PELLITE SEDIBVS NOSTRIS / FOEDA HAEC VICIORV [M] MONSTRA / VIRTVTVM COELITVS ADNOS RE[D]EV[N]TIVM / DIVAE COMITES》(どうか来て下さい、美德の神々の御伴方。天上から私たちのいる地上へと戻ってきて下さい。そしてこれら恥ずべき悪徳の怪物たちをわたしたちの居る場所から追放して下さい)の内容が確認できる³⁾²⁴⁾。

中段の碑文は、一見、筆記体のギリシア語風文字に見えるが、実際にはラテン語の文字をかなり丸く崩し、装飾を凝らしてデザインしただけのもので、文章の内容は上段と全く同じものである。



図13 (図12の部分)



図14 『ゾハールの書 表扉』, 1558-60頃, マントヴァ市立図書館。

一方、下段の文字は、G. ブージ(2001)によって真正のヘブライ語と、形だけを真似てそれらしく見せた偽のヘブライ語の文字が入り混じったものであることが指摘されている⁽¹²⁾。上段や中段と異なり、下段は意味を成さない碑文となっているが、これについてブージの説明では、ヘブライ語は容易に誰にでもその内容を明らかにする性質ではない秘儀的なものであり、いずれ明かされるであろう神の言葉として表象されていたのではないかと分析している。

このラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の言葉の並び方について図像学的な影響源として比較したいのが、1499年にヴェネツィアの出版業者アルドゥス・マヌティウスのもとで出版された著名な『ヒュブネロトマキア・ポリフィーリ』(ポリフィーロの夢の中の恋の戦い)である⁽¹³⁾。16世紀美術に大きな影響を及ぼしたこの本の挿絵に、三つの門扉をもつ岩山の絵がある(図15)。



図15 フランチェスコ・コロンナ『ヒュブネロトマキア・ポリフィーリ』, 1499年, ヴェネツィア。

この三つの門上には四つの聖なる言葉が刻まれており、主人公がどの門の道へ進むべきかが示されている。この言葉は下から上にむかってラテン語(古代ローマ語)、ギリシア語、ヘブライ語、アラビア語の順に並び、上に進むにつれ、西欧から未知の東方の言語へ、一見して、より難解深遠で容易には解き明かされない神の言葉として配列されているものと看取できる。

一方、マンテーニャの《美德の園から悪徳を追い払うミネルヴァ》においてもまた、アラビア語を除く3つの碑文が『ヒュプネロトマキア・ポリフィーリ』の挿絵と上下反転するが同じ順番で記されており、観る者に対して、古代の神聖さのauraなるものを纏ったメッセージとして、われわれ人間が話す言葉とは異なる深遠な意味を備えた神の言葉と目に映るよう、記されていたものと思われる。

このスクロールに記された擬ヘブライ語碑文の作成については、少なくともパトロンであるゴンザーガ家宮廷、とりわけイザベッラ・デステの人文主義サークルにおける古代ヘブライ語に対する文化的な嗜好を示すものであったといえる。図像考案者パリーデ・チェレザーラが関与したこの作品には、マントヴァ宮廷のサークル内でユダヤの思想文化(ヘブライズム)に対する関心、異国趣味的なテーマを求める知の流行、文化的土壌があったことが示されていたといえよう。

4) 聖家族と洗礼者ヨハネの家族

最後に、《聖家族と洗礼者ヨハネの家族》(図16)を見たい。この作品は、マンテーニャが自分の墓碑の祭壇画用に生前、準備した絵画である⁽¹⁴⁾。



図16 アンドレア・マンテーニャ《聖家族と洗礼者ヨハネの家族》, 1504-06年頃, テンペラ, カゼイン, キャンバス, 40×169 cm, マントヴァ, サンタンドレア教会堂内 洗礼者ヨハネ礼拝堂。

現在、マントヴァのサンタンドレア教会堂の入口から数えて左側一番目に位置する洗礼者ヨハネ礼拝堂(通称、マンテーニャ礼拝堂)に飾られている。画面には全部で6名の人物が描かれており、左から順にキリストの養父ヨセフ、聖母マリア、幼児キリスト、同じく幼児の洗礼者ヨハネ、聖エリザベト、ザカリアが並んでいる。

聖書にはキリストの家族と洗礼者ヨハネの家族が出会う場面について記述はないが、おそらく13世紀の文献『キリストの生涯の瞑想』が文学的源泉であると指摘されている⁽¹⁵⁾。またクリスチャン

セン(1994)によって、ヨセフの帽子にヘブライ語で「父親」を意味する言葉が書かれていることが指摘されている(図17)^(6,24)。



図17 (図16の部分)

ヨセフの頭部を見ると、確かにヘブライ語のアルファベット א(アレフ)ב(ベート)א(アレフ)で「アッバ」という発音の「父親」を意味する単語が確認できる⁽¹⁶⁾。ここでいう「父」とは養父のヨセフではなく、寧ろ真の父である「神」を暗示していると思われる。マンテーニャはヘブライ語という神聖な文字で父親=神の名を刻み、神秘的で崇高なる神を表象していたといえる。

M. ルッコはさらに、マンテーニャがヘブライ語に関する何らかの知識を有していたか、マントヴァ在住のユダヤ人学識者のもとに通っていた可能性を示唆している⁽²⁴⁾。筆者は、帯に書かれた文字のうち、父親を意味する, אבא 以外の文字は再び、ヘブライ語に似せて考案された偽の文字であることから、マンテーニャにヘブライ語の知識があったとは首肯し難いが、彼自身の墓碑の祭壇画を制作するにあたり、神聖なるヘブライ語で神の存在をそこに描き込むため、ヘブライ語の有識者、すなわちマントヴァで暮らすユダヤ人知識人との知己を得ていたことは十分に考えられるといえる。

さらに、これまでの作品と異なり、本作品でははじめてヘブライ語で意味を読み取らせる碑文となっており、しかも父=神の存在の意味をもたせ、聖なる言葉の神秘的な力を示していた点は注目すべきところであるといえよう。これがマンテーニャ自身の墓碑の祭壇画であったことから、キリスト者として彼が抱いた最後の信仰と深く関わっていたことは間違いなく、そこにキリスト教カバラとも看取できるヘブライ語の「父」を置き、

自分の魂が神に至るための道を示していたことは、今後のマンテーニャ研究にとっても決して無視しえないところであるともいえよう。

7. 結論

以上、本論ではマントヴァの宮廷画家アンドレア・マンテーニャの絵画作品から、ユダヤ表象に関わる《エッケ・ホモ》《シビュラと預言者》《美德の園から悪徳を駆逐するミネルヴァ》《聖家族と洗礼者ヨハネの家族》に焦点を当て、15世紀から16世紀にかけてのイタリア・ルネサンスを背景とする歴史的動きに置きつつ再考を試みた。その結果、《エッケ・ホモ》にみる従来のネガティブなユダヤ人のプロトタイプと同時に、ヘブライ語碑文のモチーフを描いた《シビュラと預言者》《美德の園から悪徳を駆逐するミネルヴァ》《聖家族と洗礼者ヨハネの家族》に見る、当時のユダヤ神秘主義思想カバラやヘブライズムに対する崇敬の双方が住み分けをなされながら共存する状態であることが看取できた。分析に当たっては、ゴンザーガ家領内、マントヴァのキリスト教社会における、キリスト教市民とユダヤ人定住者との関係、都市の執政者とコムニタ・エブライカの密接な関係、キリスト教知識人とユダヤ人知識人との関係など複層的な歴史状況に配慮しつつ進めるよう努めた。

ルネサンス期イタリアにおけるユダヤ社会に関する歴史学研究的の堆積がある一方、表象文化研究はまだ比較的寡少である。本研究はその一助をなすそのケーススタディであったが、今後さらなる社会史、思想史、文学史など歴史学諸分野と連携した学際学的研究が望まれるところである。

補遺

本論は平成27年度科学研究費補助金(研究活動スタート支援)「ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ家の肖像研究:16世紀スペイン統治下のイタリア美術政策」(課題番号・15H06523, 研究代表者・望月由美子)による研究成果の一部である。

注

(1)たとえば、マントヴァにおけるユダヤ人経営の銀行数は、1413年には5つ、1428年には7つと着実に数を伸ばしていった。ただし、Ioly Zorattini (2005)¹⁴⁾によると、ユダヤ人の金融業における利潤の3分の2ときには4分の3はゴンザーガ家

に取める税金として徴収されており、財政難を常に抱えていたゴンザーガ家にとって、ユダヤ人の経済活動は重要な財源をなし、互恵関係が成立していたといえる。

- (2)トレント公会議やカトリック改革後の異端取締り強化が進んだ1612年には、マントヴァ総人口約50,000名に対して2325名(4.6%)、20世紀にファシズムの台頭と共に激減し、現在の人口は約120名となるが、16世紀を通じて他の地域より安定して人口数を保っていたことがColorni (2006)⁷⁾、Ioly Zorattini (2005)¹⁴⁾の研究より知られている。
- (3)パリ国立図書館に所蔵されているアレマンノの書簡(Bibliothèque Nationale de Paris, ms. Hébr. 849)から、パリーデとアレマンノが実際に知り合ったことが確認できる。その書簡には、《学識豊かな碩学の人物に出逢った。彼は古典古代文化から最近のキリスト教義の著作まで精通していた。[...] その人物とは、マントヴァのパリーデ・チェザーリオ殿である》(Mi sono incontrato con un uomo sapiente, erudito tanto nella cultura antica quanto nelle dottrine degli autori cristiani più recenti [...] si chiama Messer Paride Cesaro, mantovano)と記されている。この書簡の初出はBusi(2001)³⁾。同じBusiによって、アレマンノがイタリア半島で活躍したユダヤ神秘主義思想家(カバリスト)で最も重要な人物で、哲学者ピーコ・デッラ・ミランドラにヘブライ語とカバラの思想を伝授した教師の一人であり、ピーコ・デッラ・ミランドラの依頼で人文主義哲学とカバラの神秘主義を融合した旧約の『雅歌』の注解を行ったことも指摘されている(Busi 2001)³⁾。
- (4)とりわけ南ドイツでは、13世紀以降の教会堂や公共建造物に豚とユダヤ人を組み合わせたイメージが散見さ、それらはJudensau(ユダヤの雌豚)と呼ばれていた。ローゲンスブルク大聖堂の彫刻は有名な一作例である。ユダヤ人が雌豚の乳を吸い、豚と淫欲な行為をする場面などであらわされ、しばしばユダヤ人のそばに悪魔の姿も描かれていた。
- (5)《エッケ・ホモ》は、マンテーニャかもしくは彼の息子あるいは工房が制作したものか見解が分かれており、この問題はLightbown(1986)²²⁾に詳しい。Luzio (1913)²⁷⁾、Lightbown (1986)²²⁾、Morselli(2000)²⁸⁾等は、1627年1月19日付のゴンザーガ家財産目録の調査から、《エッケ・ホモ》が当時、グロッタ前の通路に飾られていたことを指摘している。
- (6)制作目的はイザベッラ・デステの父親エルコレに贈るためか、他のエステ家の人物のために制作された可能性が指摘されている(Christiansen 1992)⁴⁾。もしくは、アルフォンソ・デステ二世の妻マルゲリータ・ゴンザーガが、相当数の絵画をマントヴァからフェラーラの宮廷に持ち運んだことも知られており、そこに含まれていた可能性も指摘されている(Christiansen 1992)⁴⁾。

- (7)「エツケ・ホモ」(この人を見よ)はユダヤ属州総督ピラトが死罪を求めるユダヤ群衆に向けて発した言葉である。この経緯は福音書【ヨハネ 19:5】に記されている。キリストの受難の主題として宗教画でしばしば描かれた。
- (8)文字の形体がヘブライ語のニクダー(母音符号)に似ていることから、マンテーニャはヘブライ語の筆記体を真似て描いたのではないかと思われる。Lightbown(1986)²²⁾はギリシア語の筆記体と言及しているが、これは実際に存在する文字ではなく、マンテーニャによって考案された文字である。
- (9)Katz(2000)¹⁷⁾によって、1496年4月25日付の侯爵夫人イザベッラ・デステから夫フランチェスコ二世宛ての書簡(ASMN, AG, b. 2992, libro 6, ff. 98-99v.)に、ドメニコ・ダ・ボンツォーネの説教に関する報告があることも指摘されている。
- (10)Ferrari(2006)¹²⁾の指摘にもある通り、マンテーニャは古代碑文と同様、写字文化(デザインの字体、書法)に少なからぬ関心を持ち、作品中にも様々な書体で古代ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の碑文を描いていた。
- (11)L. Rèau(1956)³¹⁾はキリスト教図像学の視点からエステル記の場面と特定しているが、モルデカイがエステルにハマンのユダヤ人虐殺陰謀を伝えている場面と捉えている。
- (12)中段のギリシア語風の碑文も同じ内容が記されている(Busi 2001)³⁾。
- (13)ヴェネツィアの出版業者アルド・マヌーツィオが出した『ヒュブネロトマキア・ポリフィーリ』のは難解な人文主義的文章と美しい木版挿絵を備えていたことで当時ベストセラーとなり、同時代の美術にも大きな影響を与えている(Szépe, 1996)³⁹⁾。
- (14)Pastore(2006)³⁰⁾は、1504年3月1日から墓碑の建設がはじまり、1506年に亡くなるまで自分の墓のための内部装飾の制作をつづけたと特定。
- (15)『キリストの生涯の瞑想』はフランシスコ修道会士がアッシジのクララ童貞会の修道女たちのために執筆した著作で、19世紀まで聖ボナヴェントゥーラが執筆した権威書として西欧で流布したものである(Christiansen 1992)⁵⁾。
- (16)ヘブライ語で「父」の意味・発音については、ヴェネツィアのコムニタ・エブライカの方にご教示いただいた。ここに記して謝意を表したい。また、新約聖書で神を意味する「父」という言葉 Abba「アッバ」に相当し【マルコ 14:36】、ラテン語に取り込まれて修道院長を表す abbot にも派生した。
- Tudor, A. P. & Hindley, A. (eds.), *Grant rise?*. Brepols, Turnhout, pp. 73-99, 2006
- 3) Busi, G.: *Mantova e la Qabbalah*. Skira editore, Milano, (esp. pp. 24-28), 2001
- 4) Christiansen, K.: *Sibyls and Prophets*. Martineau, J. (ed.), Andrea Mantegna. Olivetti / Electa, Milano, pp. 400-402, 1992
- 5) Christiansen, K.: *La Sacra Famiglia e la famiglia del Battista*. Martineau, J. (ed.), Andrea Mantegna. Olivetti / Electa, Milano, p. 253, 1992
- 6) Christiansen, K.: *Mantegna's legacy*. Boskovits, M. (ed.), *Studi di storia dell'arte in onore di Mina Gregori*. Silvana, Cinisello Balsamo, pp. 79-86, 1994
- 7) Colorni, E.: *Breve storia degli ebrei a Mantova*. Mantova Ebraica, Mantova, (esp. pp. 5, 12), 2006
- 8) Colorni, V.: *Fatti e Figure di Storia Ebraica Mantovana*. Città di Castello, (esp. p. 13), 1934
- 9) Comboni, A.: *Paride Ceresara, mantovano*. Bozzetti, C. (ed.), *Veronica Gambarà e la poesia del suo tempo nell'Italia settentrionale*. Leo S. Olscki, Firenze, pp.263-281, 1985
- 10) *Dizionario Biografico degli Italiani*. vol. 23. Istituto della Enciclopedia Italiana, Roma, pp. 720-721, 1979
- 11) Favaretto, I. & Bodeon, G.: *Cultura antiquaria e immagine dell'arte classica negli esordi di Mantegna*. Banzato, D. (ed.), *Mantegna e Padova 1445-1460*. Skira, Milano, pp. 51-61, 2006
- 12) Ferrari, D.: *Andrea Mantegna -Lettere autografe-*. Trevisani, F. (ed.), *Mantegna e i Gonzaga -Rinascimento nel Castello di San Giorgio-*. Electa, Milano, pp. 69-81 (esp. pp. 73-74), 2006
- 13) Harrán, D.: *The Jewish nose in early modern art and music*. *Renaissance Studies* Volume 28, Issue 1: 50-70, 2014
- 14) Ioly Zorattini, P. C.: *Gli ebrei a Mantova. Origini e sviluppi di una comunità padana tra medio evo ed età moderna*. *Civiltà Mantovana* XL n.120: 114-128 (esp. pp. 114-115, 121-122, 127), 2005
- 15) Jones, R.: *What Venus did with Mars -Battista Fiera and Mantegna's 'Parnassus'*. *JWCI* vol.44: 193-198 (esp. p. 193), 1981
- 16) Kaplan, P. H. D.: *Jewish artists and images of Black Africans in Renaissance Venice*. Helfers, James P. (ed.), *Multicultural Europe and cultural exchange in the middle ages and Renaissance*. Brepols, Turnhout, (esp. pp. 70-71), 2005
- 17) Katz, D. E.: *Painting and the Politics of Persecution -Representing the Jew in Fifteenth-Century Mantua-*. *Art History* vol.23 no. 4: 475-495, 2000
- 18) Knapp, F.: *Andrea Mantegna des Meisters Gemälde und Kupferstiche in 200 Abbildungen*. Dt. Verl.-Anst., Stuttgart, (esp. p. 118), 1910
- 19) Kristeller, P.: *Andrea Mantegna*. Longmans, Green, and Co., London - New York - Bombay, (esp. pp. 373, 444), 1901

文献

- 1) Agosti, G.: *Una lezione su Andrea Mantegna - Lezioni di Storia dell'Arte Dall'Umanesimo all'età barocca-*. Skira, Milano, 2002
- 2) Block, E. C.: *The Jew on medieval miseriors*.

- 20) Landsberger, F.: A new interpretation of an old picture. *Cincinnati Art Museum bulletin*, New Series 3: pp. 123-124, 1952
- 21) Lavin, M. A.: The Altar of Corpus domini in Urbino -Paolo Uccello, Joos van Ghent, Piero della Francesca-. *Art Bulletin* 49: 1-24, 1967
- 22) Lightbown, R. W.: Mantegna. Phaidon, Oxford, (esp. pp. 119, 177-185, 447-450), 1986
- 23) Lo Monaco, F.: Su Andrea Mantegna antiquarius: gli interessi epigrafici. Lucco, M. (ed.), *Mantegna a Mantova 1460-1506*, Skira, Milano pp. 37-45, 2006
- 24) Lucco, M. (ed.), *Mantegna a Mantova 1460-1506*, Skira, Milano, (esp. pp. 100-102, 112-113), 2006
- 25) Luzio, A. & Renier, R.: La coltura e le relazioni letterarie di Isabella d'Este Gonzaga. *Giornale storico della letteratura Italiana* 33: 1-62 (esp. pp. 26-27), 1899
- 26) Luzio, A. & Renier, R.: La coltura e le relazioni letterarie di Isabella d'Este Gonzaga. *Giornale storico della letteratura Italiana* 34: 1-97 (esp. pp. 86-90), 1899
- 27) Luzio, A.: La Galleria dei Gonzaga venduta all'Inghilterra nel 1627-1628. Milano, (esp. p. 117, note. 338), 1913
- 28) Morselli, R.: Le collezioni Gonzaga -L'elenco dei Beni del 1626-1627-. Silvana Editoriale, Milano, (esp. p. 299 [n.1002]), 2000
- 29) Paccagnini, G.: Andrea Mantegna. Neri Pozza, Venezia, (esp. p. 15), 1961
- 30) Pastore, G.: La cappella di Mantegna nella basilica di Sant'Andrea. A casa di Andrea Mantegna - Cultura artistica a Mantova nel Quattrocento-. Silvana, Milano, pp. 334-345 (esp. pp. 336-337), 2006
- 31) Réau, L.: *Iconographie de l'art chrétien tomo II - Iconographie de la Bible I Ancien Testament*. Press Universitaires de France, Paris, (esp. p. 338), 1956
- 32) Réau, L.: *L'art Chrétien Tome II -Iconographie de la bible II Nouveau Testament*. Presses Universitaires de France, Paris, (esp. pp. 744-747), 1957
- 33) Roth, C.: *The Jews in the Renaissance*. Jewish Publication Society of America, Philadelphia, 1959
- 34) Ruderman, D.: At the intersection of cultures -The historical legacy of Italian Jewry-. Mann, V. B. (ed.), *Gardens and Ghettos -The Art of Jewish Life in Italy*-. University of California Press, Berkeley, (esp. p. 13), 1989
- 35) Schlauch, M.: The allegory of Church and Synagogue. *Speculum* vol.XIV, n.4: 448-464, 1939
- 36) Signorini, R.: OPVS HOC TENVE -La Camera Dipinta di Andrea Mantegna lettura storica iconografica iconologica-. Silva, Parma, (esp. p. 102), 1985
- 37) Silvestri, A.: Luca Gaurico e l'astrologia a Mantova nella prima metà del Cinquecento. Aldina, Bologna, (esp. p. 14), 1939
- 38) Simonsohn, S.: History of the Jews in the Duchy of Mantua. Jerusalem, (esp. pp. 104-113, note 2), 1977
- 39) Szépe, H. K.: Desire in the printed dream of Poliphilo. *Art history* 19 (3): 370-392, 1996
- 40) Tietze-Conrat, E.: *Andrea Mantegna -le pitture, i disegni, le incisioni*-. Sansoni, Firenze, (esp. p. 180), 1955
- 41) Trachtenberg, J.: *The devil and the Jews: the medieval conception of the Jew and its relation to modern antisemitism*. Yale University Press, New Haven, 1943.
- 42) Venturi, A.: *La pittura del Quattrocento III*, Hoepli, Milano, (esp. p. 262), 1914
- 43) Verheyen, E.: *The Paintings in the Studiolo of Isabella d'Este at Mantua*. New York University Press, New York, (esp. pp. 23-28), 1971
- 44) Wind, E.: *Michelangelo's Prophets and Sibyls*. Oxford University, London, (esp. pp. 60-61), 1960
- 45) Wind, E.: *Bellini's the feast of the Gods - A study in Venetian Humanism*-. Harvard University Press Cambridge, Mass., (esp. p. 14), 1948
- 46) Zafran, E.: *The iconography of anti-semitism -a study of the representation of the Jews in the visual arts of Europe*-. Ph.D. diss., New York University, New York, 1973
- 47) 伊藤博明：神々の再生—ルネサンスの神秘思想—。東京書籍，東京，（esp. pp. 306-338），1996
- 48) M.モリスン，S.F.ブラウン：ユダヤ教。泰剛平訳，青土社，東京，（esp. pp. 13, 15），1994